



代以来重なる改造によって、もう跡形なく消えてしまった。また、12月1日に、杭州拱墅区に在る明代古橋拱宸橋並びに近所の運河博物館と刀・剣・剪博物館を見学した。

今回の訪問研究においては、多く有益な史料を入手し

ただけではなく、陳小法先生や聶友軍先生など浙江工商大学東亜研究院の研究者達との交流もうまくいき、生活の面においても、薛曉梅先生にいろいろお世話していただいた。ここに、東亜文化研究院の皆様のご厚意に心よりお礼を申し上げたい。

## フランス国立高等研究院での 絵画研究

小泉 優莉菜  
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



現在私は長崎県下における「かくれキリタン信仰」の調査・研究を進めている。今回、フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センターへの派遣を希望した理由は2つある。1つは当研究センターが図像学や宗教学に関する様々な研究実績を確立していることであり、もう1つは当研究センターのヨセフ・キブルツ先生の指導を仰ぎたいという希望があったからである。

長崎県生月島のかくれキリタン信仰においては「御前様」と呼ばれる女人の描かれた掛け軸が祀られている。しかし、彼らに聞き取りをおこなっても、これらが「何の姿を描いたものなのか」ははっきりとは分からない、という。江戸の弾圧期を聖職者のいない中で伝承を続けていくうちに「自分たちが何を祀っているのか」が分からなくなってしまったのである。そして今回、図像学の手法を専門的に学ぶことによって明らかにしていきたいと考えた絵画は生月島山田地区のものである。山田地区の御前様も誰が描かれているのかについて信者たちは分

からないという。

今後、かくれキリタン信仰に関する研究を続けていく中で、このように「何を描いたのかが分からない。」という事例に数多く出会うであろうことが予想される。そのため、キリスト教の宗教芸術に関する図像学の知識を深める必要があると考え、今回派遣を希望した。

日本におけるキリスト教カトリックの歴史と、フランス・パリの関係は深い。元々、日本へのキリスト教の布教をおこなったのは、スペインのイエズス会士である、フランシスコ・デ・ザビエルらの一派が最初であるとされている。しかしその後の弾圧や禁教政策により、その当時のキリタン文化はほぼ失われてしまった。今ではそれらを、かくれキリタン信者たちのキリタン文化の中に、片鱗をうかがうことだけしかできない。

しかし、その後、明治以降に日本国内でパリ・ミッション教会が精力的に布教活動をする中で、かくれキリタン信仰にも少なからず影響を与えていた、ということが今回の調査で分かった。1873年に日本でのキリスト教禁教令が解かれた後、真っ先に再布教に乗り出した会派こそが、パリ・ミッション教会である。そして、こ



図1 使徒ヨハネの立像  
(中世美術館にて撮影)



図2 エッフェル塔



図3 サクレ・クール寺院内部



図4 マドレーヌ寺院内部の  
パイプオルガン

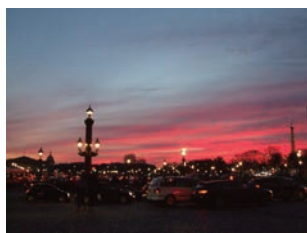


図5 シャンゼリゼ大通りからの夜景



図6 使徒ヨハネとイエス (最後の晩餐の一部)



図7 生月島寺部地区の御前様

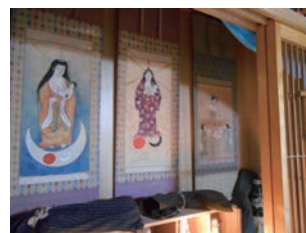


図8 生月島山田地区の御前様

のパリ・ミッション教会によって設立された教会が長崎県の大浦天主堂であり、その後、日本キリスト教史における重要な出来事である「信徒発見」がおこなわれたのもこの大浦天主堂である。

パリ・ミッション教会は再布教活動を大変熱心におこなっていたといわれている。今回、パリ・ミッション教会の本部での資料調査をおこなう機会もあった。そこには明治期に日本に派遣された宣教師たちの記録が残されており、今後の追跡調査の良い資料を得ることができた。本派遣の研究対象であった、生月島山田地区の「御前様」は、調査の結果、「再布教時にこの島にもたらされたものである。」ということ考察しうる、という結果になった。しかし、どの会派がもたらしたものであるのか、何に基づく絵なのか、ということは結論付けることができなかった。今後、調査を進めることで、かくれキリシタン信仰と、パリ・ミッション教会との関係性も明らかにできるのではないかと考えている。

今回、フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センターへは、12月22日～1月11日という期間の中で

伺った。年末はヴァカンス期間と重なったこともあり、高等研究院自体は閉館していたが、指導教官であるキブルツ先生により、研究院へ入館するパスワードと鍵をお借りすることで、自由に研究院へと入り、資料調査をすることができた。また、パソコンや印刷機も自由に使えるよう許可していただき、当初の予定よりも資料調査を進めることができた。

しかし、調査終盤である1月7日に世界を驚かせたシャルリー・エブド社への襲撃事件が起きてしまった。各施設や、交通機関が厳重な警備体制となる中、調査をおこなうこととなった。

国と国、文化と文化、そして、信仰と信仰の対立と摩擦によって引き起こされた今回の事件を、偶然にも現地体験することとなった。そこからは、かくれキリシタン信仰も様々な歴史的・社会的背景のもと、現在の姿を残しているのだということを再認識することとなった。

## 広東省広州市中山大学への派遣調査



鍋田 尚子  
(歴史民俗資料学研究所 博士後期課程)

2014年10月20日から11月9日まで中国の広州にある中山大学に3週間滞在し、灶神の調査をおこなった。私の研究対象は、ベトナムの灶神である。灶神はベトナムではオンタオと呼ばれる。なぜ広州の灶神を調査するかというと、ベトナムには広州・潮州からの移民が多く会館も建てられており、南部ホーチミンにあるチョロン(中国人街)には多くの広東人が暮らしていることから、広州周辺の灶神を調査することでベトナムのオンタオにどのような影響を与えたかを研究することができると考えたからである。

とはいえ、広州は初めて。土地勘もなく言葉もほとんど話せない。どのような調査ができるのかと出発前はとても不安だった。しかし、この3週間は自分でも驚くほ

ど充実した内容の濃い時間となった。広州に着いたときから最後まで多くの人々に助けられ続けた。空港に到着すると、チューターの劉成澄さんが待っていてくれた。ホテルのチェックインを済ませ、大学に行き指導教員へのあいさつを終え、事前に連絡をもらっていた劉先生の研究室に行く。劉先生はすぐにどんな調査がしたいかを私に尋ね、色々と考えてくれた。そして距離が遠いからとあきらめていた潮州調査が最初に決まった。それも「明後日から潮州に行きなさい」と劉先生から私のチューターに連絡が入り、私たちは急いで列車を予約し現地向かった。私が調査できたのも楽しく充実して過ごせたのもチューター劉成澄さんのおかげである。彼女は公務員試験目前の大変なときにもかかわらず、急遽1泊調査